

特別展「千石荘の自然」

場所：貝塚市立自然遊学館

期間：2013年6月16日～7月14日

貝塚市にとっての千石荘の自然

草地、雑木林、畑、水田、ため池、用水路などさまざまな環境を含む里山的景観が保全されていること、貝塚市内の他の場所では宅地開発や圃場整備によってそれらの景観が失われてきたこと、および貝塚市内のほぼ中心部に位置することから、千石荘の自然は貝塚市にとって貴重なものです。

同じく貝塚市の丘陵地にある東山や馬場の自然のかなりの部分が失われ、さらに千石荘の自然が失われることになれば、貝塚市の自然は、近木川河口・二色の浜から和泉葛城山の山麓までの間が「スカスカ」になってしまいます。

和泉葛城山の山頂には天然のブナ林がありますが、山麓の景観は、有用林とは言え、スギ・ヒノキ植林が大半を占めます。千石荘の里山的景観は、現在の貝塚市にとって和泉葛城山山頂付近と近木川河口・二色の浜と並ぶ貴重な自然と言えます。

この特別展では、今年で20周年を迎える自然遊学館がまとめてきた記録をもとに、千石荘にどのような動植物がすんでいるのかを紹介します。種数が多いのは昆虫と植物で、それぞれ約680種と約380種になりました。陸産貝類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類も紹介しています。キノコとクモはあまり調査が進んでいませんが、現時点の結果をまとめました。いずれのグループもこれからの調査で種数が増える可能性があります。

ほとんどの写真では1種1種を別々に紹介していますが、心にとめておいて欲しいことは、どの種も単独で生きているのではなく、食う食われる、競争、共生など、何らかの形で、別の種と関わりを持って生きていることです。その他にも、落葉が積もってできた腐植層にすむ小動物や微生物がいます。水生生物はドブガイだけを紹介しましたが、ため池、水田、用水路には、他の水生生物もすんでいます。それらを含めて千石荘の自然を頭の中に思い描いていただきたいと思います。

千石荘の位置

千石荘と呼んでいる一帯の北側は、住所で言えば、貝塚市名越になります。南側は貝塚市三ツ松です。名越と三ツ松で千石荘の大半を占めますが、北西の角は貝塚市橋本、大井谷池から北西へかけての細長い農耕地は熊取町七山北に当たります。

千石荘の範囲を広くとると、標高は50mから80m近くになります。標高70mを越える場所（小山）が数か所あり、その一番北側の場所が根来衆の出城があった「千石堀城址」です。

特別展「千石荘の自然」

貝塚市の丘陵地に残された千石荘の里山にすむ動植物を紹介します



期間：2013年6月16日（日）～7月14日（日）
（土・日・水曜日 9:00～21:00 月・木・金曜日 9:00～17:00）
場所：自然遊学館多目的室

千石荘の景観と植物

南北約 1 km にわたる細長い地域に、樹木が生育し、森になっています。その西側は農耕地帯、東側は千石荘病院跡地です。その森の北寄りの部分は、千石掘城址周囲のコナラやアカマツが優占する林と牛神池周辺のヤマモモやナナメノキが優占する林に分かれています。コナラやアカマツが優占する林は、かつては里山の薪炭林として利用されていたものと思われます。

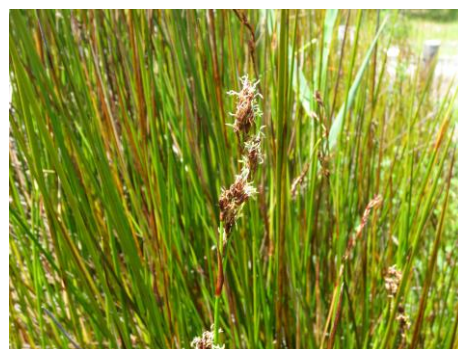
南寄りの部分は樹木も大きく樹高 25m を越えるものもあり、ヤマモモ、ナナメノキ、カゴノキ、カクレミノなどの暖地性の照葉樹林の構成種を多く含んでいて、当地周辺の本来の植生を伝えるものとして貴重です。

大阪府レッドデータブック（大阪府、2000）の指定種で特筆すべきものは、牛神池のアンペライで、泉南地域でこれだけ安定したアンペライの群落があるのは千石荘だけだと思われています。

自然遊学館の調査では、貝塚市内でこれまでに約 1,150 種の植物が確認されていて、そのうちの約 380 種が千石荘で確認されています。



牛神池



アンペライ

千石荘のキノコ

担子菌類 13 科 34 種、子囊菌類 3 科 3 種のキノコ（菌類）が確認されています。担子菌と子囊菌の違いは胞子のできる部位で、簡単に言えば、担子菌が（担子器の）外側、子囊菌が（子囊の）内側ということになります。

担子菌類では、ヒラタケ、ムラサキシメジ、キクラゲなどの美味しいと言われるキノコもあれば、クロタマゴテングタケやニセクロハツという猛毒のキノコも確認されています。

子囊菌類では、オオゴムタケという「食べられそうにないけど食べられる」キノコが確認されています。以上のキノコは腐植土や朽木などの植物遺体から生えるものですが、子囊菌類のガヤドリナガミツブタケは冬虫夏草の一種で、ガの成虫に寄生するものです。

キノコはクモと並んで自然遊学館の調査が不十分なグループで、調査が進めば種数はさらに増えると思います。

千石荘の昆虫

自然遊学館が千石荘で記録した昆虫は約 680 種で、貝塚市全体の約 2,650 種のおよそ 4 分の 1 を占めます。大阪府レッドデータブック（大阪府、2000）の指定種は 8 種で、ランクの内訳は絶滅危惧Ⅱ類がネアカヨシヤンマ、マルタンヤンマ、準絶滅危惧がベニイトトンボ、ナニワトンボ、ネキトンボ、ヤスマツアメンボ、コシロシタバ、要注目がクルマバッタです。

種数が多いグループはコウチュウ目 174 種、カメムシ目 146 種、チョウ目 108 種（うちチョウ類 47 種）、ハチ目 83 種（うちアリ科 21 種）、ハエ目 58 種、バッタ目 47 種、トンボ目 40 種の順番となっています（ただ、昆虫の場合は未記載種といって名前が付けられていない種などもあり、本当に千石荘に昆虫が何種いるのかは見当もつきません）。

自然遊学館が注目してきた種の代表は、「青いアカトンボ」ことナニワトンボ、「アブラギリがあるのか期待を持たせた」オオキンカメムシでしょうか。その他にも、貴重さでは絶滅危惧種に劣らないサツマシジミも確認されたことがあります。ラクダムシ、キノコヒモミノガ、ヤノクチナガオオアブラムシなど、けったいな虫もいます。皆さんの中には、クヌギの樹液で、カブトムシ、コクワガタ、ヒラタクワガタを捕まえたという方もいるでしょう。

注目すべき種、きれいな種、変わった種、かっこいい種も大切です。それに加えて、千石荘の昆虫相の一番の特徴は、いわゆる普通種がたくさんいる、ということだと思います。そう思うのは他の場所で昆虫たちのすみ場所がどんどん奪われ、普通種が普通種でなくなってきたからです。



ヒラタクワガタ

千石荘のクモ

クモはすべて捕食者で、昆虫などを摂食します。生態系の中で重要な役割を果たしていることや、セアカゴケグモのような危険な外来種もいることは重々承知していますが、クモもキノコと並んで、自然遊学館の調査が不十分なグループです。貝塚市内でこれまで約 80 種、千石荘では 9 科 21 種のクモが確認されていますが、調査が進めば種数はさらに増えると思います。

千石荘のカタツムリ

千石荘の森は標高 55~60m の丘陵地にあり、一次林（人によって植林されていない自然の植生）が残る貴重な森です。カタツムリの仲間も多く生息します。

木に上る大形のクチベニマイマイ、ナミギセル、シュロやアオキの葉裏では小形のウスイロシタラ、アワジオトメマイマイがよく見られます。最近の調査で千石荘の入口でナミマイマイとナミコギセルを発見しました。その他に地上性のオオケマイマイも生息数の多い種類です。

落葉の中にはオカチョウジガイやクチマガリマイマイ、ウラジロベッコウ、5 mm 以下の小形種ではミジンヤマタニシ、カサキビ、オオウエキビ、コシダカシタラなどが、また落葉に埋もれた倒木や枝の裏側にはオオクラヒメベッコウが多く生息します。7 科 23 種の生息が確認できています。

（文：児嶋格氏、2012 年「かたつむり展」より）

千石荘の両生類、爬虫類、哺乳類

両生類は、貝塚市内でこれまでに 11 種が確認されていて、そのうち、ニホンアマガエル、ウシガエル、ヌマガエルの 3 種が千石荘で確認されています。

爬虫類は、貝塚市内で 16 種が確認されていて、そのうち、クサガメ、ミシシippiaカミミガメ、

ニホンヤモリ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、シマヘビ、タカチホヘビ、ニホンマムシの8種が千石荘で確認されています。このうち、タカチホヘビは大阪府レッドデータブック（大阪府、2000）で情報不足に指定されています。

哺乳類は、貝塚市内で20種が確認されていて、そのうち、ヒミズ、ノウサギ、カヤネズミ、アカネズミ、アライグマ、ニホンイノシシの6種が千石荘で確認されています。このうち、カヤネズミは大阪府レッドデータブック（大阪府、2000）で要注目指定されています。

以上の種のうち、カヤネズミは巣による確認で、それ以外は生体や死体による確認です。トノサマガエル、アオダイショウ、タヌキ、イタチ類（イタチかチョウセンイタチ）、アナグマは記録がありませんが、生息しているかもしれません。

千石荘の鳥

2005年から冬のバードウォッチング行事を始めました。それ以来、2013年の行事までに53種の鳥が確認されました。その記録と、自然遊学館に寄せられた画像等の記録を足すと、30科62種の鳥が千石荘で確認されたことになります（貝塚市全体で確認されている鳥は188種です：自然遊学館が確認した分）。

その中には、大阪府レッドデータブック（大阪府、2000）で指定されている種が11種含まれています。ランクの内訳は、絶滅危惧Ⅱ類がオオタカ、クイナ、準絶滅危惧がササゴイ、オオバン、カワセミ、ホオアカ、要注目がカワウ、ミサゴ、ハイタカ、ノスリ、ケリです。帰化鳥はドバトとソウシチョウの2種です。バードウォッチングの行事は冬に実施しているため、夏鳥がリストから抜けて、実際には種数はもっと多い可能性があります。



コゲラの子育て
(食野俊男氏撮影)

謝辞

コゲラの子育ての写真など、今回の特別展の鳥の写真はすべて、市内在住の食野俊男氏から寄贈していただいたものです。鳥たちが子育てできるということは、餌となる昆虫などがたくさんいて、昆虫たちの食べる植物も豊富だということを示しています。

カタツムリの写真は、自然遊学館客員講師の児嶋格先生の調査に同行して撮影したものです。陸産貝の解説文は、昨年12月から開催した「かたつむり展」で、児嶋先生が千石荘の陸産貝類について書かれたものを、そのまま引用させていただきました。

植物の写真は、自然遊学館元館長の上久保文貴先生の調査に同行して撮影したものです。植物の解説文は、2003年発行の「貝塚の自然—自然遊学館10周年記念号」で、上久保先生が書かれたものを参考にしました。

最後に、千石荘の動植物に関して、データ、標本、写真を寄贈していただいた多くの方々に感謝致します。

(2013年6月16日、貝塚市立自然遊学館作成)